「神様との共同作業」

使徒言行録１：12－26
ヨハネによる福音書15:5

２０２３年5月21日
野村　友美 師

＜祈りながら歩き出す＞

G7サミットもようやく今日が最終日ですね。たくさんの人が安全のために心を砕いていますから、このまま無事に終わりますように、また、今回話し合われたことが、平和の実現に用いられていくように祈るばかりです。

先月末には、この呉ナザレン教会の教会総会がありました。先々週の礼拝の後、私たちは新年度の役員に選ばれた方たちの任命の時間を持ちました。役員の方たちには、教会の働きのために祈りながらそれぞれの務めを果たすことを誓い、約束していただきました。そして教会員の皆さんにも、役員のために祈って支えることを誓約していただきました。それは、教会が教会として働くために、何よりもまず祈りが必要だからです。私たちがどんなに知恵を絞って力を尽くしても、どんなに素晴らしく見える結果を出したとしても、神様への祈りがなかったら、それは教会の働きとは呼べません。教会は、神様と私たち人間の共同作業によって造り上げられるものなんです。

今日ご一緒に読んでいる使徒言行録のエピソードも、このことを私たちに教えています。

＜祈る弟子たちの共同体＞

十字架で死なれて３日目に復活されたイエス様は、それから４０日間弟子たちと一緒に過ごして、神の国について話をして、弟子たちに聖霊を送ると約束なさいました。聖霊を受け取ったら、あなたたちはイスラエルだけじゃなくて地の果てに至るまで、どこまでもわたしのことを証言する人になる。そう予告してから、イエス様は弟子たちの目の前で天に上げられました。

イエス様が天に上げられた後、弟子たちはオリーブ山からエルサレムへ戻っていきます。オリーブ山からエルサレムまでは、安息日にも歩くことが許されている距離だった、とここで聖書は語っています。そう言われても、ちょっとピンときませんよね。イスラエルの律法では、「安息日にはどんな仕事もしてはいけない」と決められていました。この「どんな仕事も」には長い距離を移動することも含まれる、と考えた学者たちが律法を守るための細かい規則で、安息日に移動してもいい距離を２千キュピト、大体９００ｍぐらいに決めたんだそうです。

つまりオリーブ山からエルサレムまでは、１㎞もなかった、ということなんでしょう。１㎞弱だったら、ゆっくり歩いても１５分か２０分ぐらいで戻れただろうと思います。きっと興奮が冷めないまま、エルサレムに戻った弟子たちは、そのまま泊まっていた家の二階の部屋に上がって、みんなで熱心に祈り始めました。

イエス様を裏切ったイスカリオテのユダを除いて、１１人になった使徒たち。イエス様の弟子になって、ついて来ていた女性たち。そして、イエス様を生んだお母さんであるマリアと、イエス様の兄弟たちがこの祈りの場所にいたことを、聖書は伝えています。イエス様に兄弟がいたというのは、不思議に思えるかもしれませんが、どうやら彼らはイエス様がお生まれになった後、マリアとその夫のヨセフの間に生まれた兄弟たちのようです。イエス様がガリラヤで宣教しておられた時、この兄弟たちがお母さんのマリアと一緒にイエス様に会いに来たエピソードをマタイ、マルコ、ルカの３つの福音書が伝えています。会いに来たということは、イエス様の兄弟たちは最初の頃からイエス様と一緒に活動していたわけではなかったんでしょうね。ひょっとしたら、兄弟たちにとっては、イエス様の存在ってちょっと複雑だったのかもしれません。

生まれ故郷のナザレの会堂で、イエス様が安息日に聖書の言葉を解き明かされた時、集まった人たちはイエス様のことを素直に認められませんでした。立派なことを話してるけど、この人は大工のヨセフの息子じゃないか。この人の母親も兄弟姉妹も、私たちと一緒にこのナザレで暮らしている。そう言って、ナザレの人たちはイエス様を自分たちと同列に扱いたがったんです。しかもマルコの福音書は、「イエスは気が変になっている」という噂を聞いた身内の人たちが、イエス様を取り押さえに来たことを伝えています。どういう経緯があったのか、イエス様の兄弟たちがどんな思いを味わっていたのか、私たちにはわかりません。聖書はただ、彼らがこの祈りの場所にいたことだけを、確かな事実として伝えています。

そうやって、イエス様を救い主だと信じる信仰で結ばれた１２０人ほどの人たちが集まって一緒に祈っていた、ある日のことです。使徒たちのリーダーだったペトロが、立ち上がってみんなに話し始めました。イエス様を裏切ったあのユダのことは、ダビデ王の時代から聖霊によって預言されていて、実現しなきゃいけないことだった。ユダは聖書の詩篇の言葉のとおりに、自分がしたことの報いを受けて命を落とした。そして詩篇には、「彼の務めを他の人が引き受けるように」という言葉もある。だから使徒としてのユダの役目を引き継ぐために、誰かを選ぶべきだ。このペトロの主張を聞いて、人々は新しく使徒になる人を選ぶことにしました。使徒になるのは、ヨハネの洗礼の時から始まって、イエス様が天に上げられた日まで、つまりイエス様の活動を最初から最後まで見届けてきた人、という条件をここでペトロは挙げています。イエス様の弟子たちには、ペトロみたいに最初の頃からイエス様と一緒にいた人たちもいれば、ガリラヤからエルサレムへの旅の途中で弟子になった人たちもいました。もちろん、弟子歴が長ければイエス様のことをよく理解している、とは限りません。時間や経験がその人の信仰をより強く、より深くしてくれる

ことは確かにありますが、１２０人の弟子たちの中には、イエス様と一緒に過ごした時間は短くても、賢かったり熱心だったり優しかったり、使徒にふさわしそうな人たちもいたでしょう。それこそ、イエス様の兄弟たちだってそこにいました。でも使徒に選ばれるのには、能力とか血筋は関係なかったんです。ペトロが大事にしているのは、先輩後輩みたいな序列でもありませんでした。弟子たちはやがて聖霊を受け取って、自分たちが直接見て聞いて体験したイエス様の出来事を証言することになる、とイエス様から約束されていました。新しく使徒になる人は、そんな弟子たちの指導者として働くことになるんだから、イエス様の出来事を最初から最後まで一部始終、しっかり目撃した人であってほしい。そうペトロは考えたんです。また聞きの噂話とか誰かの理想の物語じゃなくて、自分たちが体験したイエス様そのものを証言する共同体であるために。

＜神様との共同作業＞

　でも、新しい使徒は条件だけでは決められませんでした。弟子たちにイエス様の証人になる力を与えて送り出すのは神様の霊、聖霊だということを、イエス様は繰り返し言っておられました。１２人の使徒は、聖霊と一緒に働く人たちのリーダーになるんです。だから誰よりもまず神様がお選びにならないと、使徒の仕事はできない。そのことを、ペトロたちは自分自身のこととしてよく知っていました。最初に１２人の使徒たちを選んだとき、イエス様はまず１人で　山に行って一晩中、神様に祈られました。最終的にお決めになるのは神様だ、とペトロたちはよくよくわかっていたんです。だからといって「考えてもどうせ無駄だから」なんて、自分たちの責任を放り出して神様に丸投げしてしまうこともしませんでした。

　使徒とは何なのか、自分たちが任せられている役目はどんなものか。そのことに、ペトロたちはしっかりと向き合ったんです。責任を持って使徒の役目に向き合って、考えて、候補者を２人まで絞った弟子たちは、自分たちの精いっぱいの結果を神様に差し出して祈りました。すべての人の心をご存知の神様、ユダの使徒としての任務を引き継がせるために、この２人のどちらをあなたがお選びになったか教えてください。そう祈ってからくじを引いた結果、マティアという人が新しい使徒に選ばれました。この時代のイスラエルの人たちにとって、くじ引きは運試しでも占いでもなくて、神様の意思を確認するための方法でした。旧約聖書にも、神様が誰をお選びになったかをくじ引きで尋ねる場面がよく出てきます。まだ聖霊が与えられていなかったこの時期、弟子たちと神様との共同作業にはこのくじ引きという方法がいちばんふさわしかったんです。神様がどういう基準でマティアをお選びになったのかは、何も伝えられていません。ただ面白いのは、もしペトロたちの判断だけで選んだとしたら、たぶんマ

ティアじゃなくて、もう１人の候補者ヨセフの方が選ばれただろうと思えることです。彼はヨセフという名前の他に、バルサバとユストという２つの呼び名を持っていました。バルサバはイスラエルの言葉で「安息日の息子」、ユストはラテン語で「正しい人」という意味の名前です。ヨセフはよくある名前でしたから、区別するために呼び名があるのは珍しくありませんでした。ただ２つも呼び名があって、それがわざわざ紹介されているということは、このヨセフは当時の弟子たちの間ではけっこう有名な人だったんでしょう。でも神様と弟子たちの共同作業の結果、選ばれたのはマティアでした。

イエス様の弟子たちの群れ、教会は、初めの時から現在の私たちに至るまで、いろんな人が集められている共同体です。得意なことも苦手なことも、良いところも良くないところも、強さも弱さもそれぞれです。みんな違うし誰も完璧じゃない、そんなデコボコの私たちにイエス様が聖霊を与えて、神様の愛と救いを証言するために働く１つの共同体にしてくださる。私たちが差し出す精いっぱいを通して、神様が神様の思いを実現される。それが教会という共同体なんです。そういう教会の姿を、イエス様はぶどうの木とその枝に譬えておられます。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」（ヨハネ15:5）

ぶどうの実は枝につきます。木の幹に直接ぶどうが実ることだって、なくはないかもしれません。それでもほとんどの実は、枝の先に生まれて育つものです。だから枝は実をつけるために、少しでも良い方向を探して精いっぱい伸びていきます。頼もしい立派な枝もあれば、ひょろひょろ細かったり、ちょっとひねくれて曲がってたりする枝もあるでしょう。でも幹にしっかりつながってさえいれば、どんな枝でも実を結ぶことができます。それと同じように。イエス様という幹につながっているなら、私たちが少しでも良い方向を探して精いっぱいの力で伸びたその先に、聖霊が豊かな実を結ばせてくださる。

この希望を見つめながら、教会は神様と共同作業をする一本の枝なんです。新しい１週間も、新しい１年間も、そしてその先も、私たち一人一人が、そしてこの教会が、神様との共同作業を続けていくことができますように。私たちの精いっぱいを神様に差し出して、神様の思いを祈り求めながら進んでいけますように。

ご一緒にお祈りいたしましょう。